

ピケティ人気の理由

―世襲資本主義への警鐘：格差、貧困、テロ―

2015年2月6日

若干43歳のフランスの経済学者トマ・ピケティ氏が世界で注目されている。著書『21世紀の資本』が世界で150万部ものベストセラーになっているというから驚きだ。先月来日したが、各メディアはまるでノーベル賞受賞者なみの熱狂ぶりだ。なぜだろうか。

一番の理由は世界的な格差拡大の実態を膨大な歴史データで実証して見せたこと、そしてここが重要だが格差の世襲による固定化（世襲資本主義）への警鐘を鳴らしたことである。

格差（不平等）は格別目新しい問題ではない。きわめて身近な問題だ。金持ちの子供とそうでない子供の教育格差をみればよい。今年も受験シーズンをむかえ首都圏では中高一貫の受験競争が熾烈をきわめているが、格差はすでにここに始まっている。ハーバード大学や東京大学の学生の親の所得がそれを物語っている。所得格差が教育格差を生み、それが親から子への悪循環の連鎖となる。かつて本欄に投稿した「格差の出発点」（2010年1月31日）である。

格差は貧困の問題であり、労働（非正規労働）の問題であり、また若者の問題でもある。とりわけ子供の貧困は深刻だ。持つ者（富裕層）と持たざる者との格差を放置すれば、格差、貧困、そしてテロが広がるきわめて不安定な社会になる。著書での富裕層（資産家）の経済分析は、実は貧困や労働の問題と表裏の関係にある。

ピケティ人気の真の意味は、社会がこの極めて深刻な問題に焦点をあて、その正体に正しい目を向けることにこそある。政治も巻き込んだピケティ人気は、同時にピケティ・ショックでもある。

（高知新聞への投稿）